【377】

氏　名（本籍）	岡（おか）　恵介（けいすけ）（岩手県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　2264　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**北上山地山村における自然と生業をめぐる民俗生態史的研究**

主　査	筑波大学教授	理学博士	西　田　正　規
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	真　野　俊　和
副　査	筑波大学助教授	Ph. D.（考古学）	マーク・ハドソン
副　査	筑波大学大学院生命環境科学研究科助教授	農学博士	増　田　美　砂

論　文　の　内　容　の　要　旨

本研究は，「民俗生態史」の視点から，「自然知」が山村の危機管理または生存戦略においていかなる機能を果たしたかを明らかにしようとする。そしてこの「民俗生態史」は，「自然知の体系」を備える民俗社会が自然環境に向き合って生きた歴史として通時的に分析された。内容は序章および 6 章によって構成される。

序章では，「研究の目的と方法」と「これまでの研究と本研究の位置づけ」と題して本研究の研究史上の位置を述べる。主たる分析対象とした岩手県岩泉町安家地区は，地理学では「実験山村」として注目されているほか，農業経済分野では昭和前期に積雪地方農村経済所による研究がある。加えて，日本史学においても特に近世の製鉄にかかわる諸資源の流通地帯として研究蓄積がある。こうした広範囲にわたる学問領域の諸研究を前述の視点から再検討するとともに，現時点における生業や物質文化，社会関係等に関するフィールドワークを重ね，「民俗生態史」としての山林利用の総合的な把握を行うとしている。

第 1 章「対象地区の概観」では調査地の自然的，歴史的環境を整理する。山深い地形とわずかな耕作地，ヤマセなどによる不安定な気候と収穫や，ヒエ，小麦，アワ，大豆を主体とする畑作の卓越を指摘するとともに，人口や行政組織の変遷等を概観している。とくに，安家地区の社会構造を理解する上で重要なことは，明治 40 年（1907）から大正 6 年（1917）ごろにもっとも多くの名子を抱えて展開した，近代以降に組織された名子制度であると指摘する。さらに，安家地区を含む岩手県北部の北上山地山村を特徴づけるのは，畑作に基礎をおく文化であることもあわせて指摘する。

第 2 章「描かれた昭和の北上山地」では，研究対象である北上山地の山村が，高度経済成長期の日本においてどのように見られてきたかを検討する。当該期，北上山地を形容する言葉として形容詞チベットが多用された。その使われ方の変遷を，100 点以上の文献資料を用いて追跡し，この地域に向けられた外部社会の眼差しを追っている。明治後期，チベット旅行記の流布とともに，チベットという言葉に僻地や貧困などの負のニュアンスが付着した。昭和 12 年（1937），岩手県内の交通不便な地域がはじめてチベットと形容されたが，未だ一般的用法ではなかった。昭和 20 年代以降，形容詞チベットの使用例は増加し，30 年代になると形容詞チベットは岩手県全体を形容する言葉となって広く浸透した。そこには都市の好奇や蔑視の眼差しだけでなく，自ら国家的地域開発計画の導入の必要性を強調する側面も存在した。昭和 40 年代から 50 年に，

形容詞チベットは放送禁止用語になってようやく使用例は減少したが，同時に，高度経済成長による都市への一極集中化やエネルギー政策の転換，農産物の輸入自由化などにより山村の比重が急激に低下したことを指摘している。

第3章「北上山地山村の森林利用」では，北上山地山村の森林が，商品資源だけでなく，生活を支える貴重な資源であり信仰儀礼にまでかかわっていることの意味を指摘する。近世以来，安家地区で営まれた狩猟や養蚕，鉄山，牛飼養，製炭，枕木生産などの商品生産の展開と変容を明らかにする。またさらに，木の実や山菜，薬草の採集，自家用建材や農具材料，衣服材料などの採集，さらには焼畑の開墾など，山村の暮らしを支えた森林利用の豊富な技術と知識をフィールドワークに基づいて詳細に記述している。

第4章「北上山地山村における生業と社会の構造的変容」では，安家地区の生業にかかわる時期を生産構造上のあり方から，①藩政時代の「鉄山隆盛期」，②明治維新以降40年（1907）頃までの「牛飼養・養蚕－畑作期」，③明治41年以降，昭和9年（1934）までの，全村がダンナのもとに階層的な関係性と構造を形成した「ダンナシステム確立期」，④昭和10年から25年（1950）までの「炭焼勃興・戦時統制期」，⑤昭和26年から44年（1969）までの「炭焼隆盛・衰退期」，⑥昭和45年から平成元年（1989）ごろまでの「多生業分散期」，⑦平成2年以降の「土木作業・多生業化・年金期」の7期に区分する。

その上で各期について検討するが，とくに近代における名子制度のあり方に注目する。安家地区には，ダンナサマと称された村内2戸の地主と村外地主が存在し，一方に，地主層から生産基盤の一切を借用し，毎年定額の現金納入を義務づけられた小作人としての名子がいた。ダンナサマは④期には牛小作を，⑤期には山林経営手段を掌握することで，換金型生計活動の手段の全てを所有し，小作のみならず広く村内の経済を掌握した。明治40年（1907）以降，大正5年（1916）にかけての名子の急速な増加によって成立したこうした社会システムを，著者はダンナシステムと位置づける。④期に行われた農地解放は，当該地域における主要な生産手段が山林であったことによってダンナサマの経営に決定的な影響を与えず，このシステムが機能を失うのは⑦期の「土木作業・多生業化・年金期」であったことを指摘する。

第5章「北上山地山村の生存戦略とその成立条件」では，先行研究から「居住地域内完結型」と「居住地域外志向型」の生活戦略の二つの概念を援用し，自給的基盤を温存し，多様な資源を利用して外部経済の変動に対応してきたこの地域の生存戦略の特性と背景を考察する。とくに，北上山地山村において外部からの食料移入が途絶えた「欠配」時において，域内の自然環境から野生植物を採集・加工して食料を獲得・貯蔵し，自給性を高めた具体事例を詳細に把握している。その上で，「居住地域内完結型」の持続可能性を評価するとともに，堅果類の重要性やミズナラの卓越する北上山地の生態的特徴を指摘している。これらの技術が古くは少なくとも天保7年（1836）から存続してきたことを指摘している。

第6章「総括と討論」では，北上山地の山村が低温や遅霜，ヤマセによる日照不足などによる凶作・飢饉の常襲地帯でありながらも，地場の資源を最大限有効に利用する「居住地域内完結型生存戦略」は，①畑作における多品種少量栽培による危険分散，②食料不足に対応する焼畑開墾や堅果類の利用，③自給的で循環的な「牛飼養－畑作関係」の温存，④外部経済の変動に対応する村内社会の柔軟な可変性，によって実現されたことを指摘する。

こうした資源利用や社会の様態に対する多様性こそが，山村が直面した危機的状況に対処し得た要因であったことを検証し，現代において地域社会が持つ多様性が，国が進める近代化の進行の中で失われることによって，この地域の衰退は裂けがたいものになったと結論する。しかしながら，この新たな危機的状況の打破の方向もまた，北上山地山村が創出してきた①から④に集約される生態知・社会知に大きな示唆が与えられることを指摘して本論を終えている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は，現在を強く意識しながら山村の総合的な把握を目指した意欲的な研究である。生存戦略を把握することから山村のあり方を捉えようとする方法は明快であり，それにより山村研究にまとわり付くことの多い都市的な評価の排除に成功している。山村における「自然知の体系」の実態と，それを背景とした民俗社会と自然との交渉の関係性を「民俗生態史」と位置づけ，通時的な側面に重点を置いて分析するという斬新な方法論を確立しようとした点は，山村のみならず，地域研究に新たな研究の地平を切り開くものとして評価しうる。またフィールドワークに基づく山村研究の成果は，生産と生活にかかわる技術や知識の記録と復元に多大な寄与をもたらすものでもある。

しかしながら，本研究にはなお解決すべき点も残される。とくに，第 1 章から第 6 章の内容は多義にわたっており，それらを一貫させる論理の構成になお模索されるべき点が残る。また，関係する歴史学・地理学・民俗学の諸成果との学際的な研究の積み上げにも若干の改善の余地がある。しかしこれらは，本論文の価値を損なうものではない。これらは，本論文をもととした地域の環境的・歴史的諸条件に応じた多様な山村の生存戦略が明らかにされ，その全体を視野に入れた議論の展開の中で解決されるものと期待される。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有すると認める。